

胚移植

塩谷 雅英

Summary

胚移植は治療成績を左右する重要なステップである。胚が着床しやすい部位は、妊娠初期の胎嚢付着部位の観察の結果から、子宮底に沿って横長に広がっていることが確認される。生殖補助医療 (assisted reproductive technology ; ART) においては、胚と子宮内膜の cross talk が不十分となり子宮内膜の胚受容能発現が不十分となりやすい。当院では、子宮内膜の胚受容能の発現を促進させる二段階胚移植法および子宮内膜刺激胚移植法 (stimulation of endometrium embryo transfer ; SEET 法) を実施している。新鮮胚移植周期では胚と子宮内膜の同期が損なわれやすい。凍結・融解胚移植では、胚と子宮内膜を同期させることが容易であり、胚を一旦凍結し、刺激周期とは別の周期で子宮内膜と同期させて胚を融解移植することで成績向上を期待できる。

Key words

胚移植
胎嚢付着部位
cross talk
二段階胚移植法
SEET 法

Masahide Shiotani

医療法人社団英ウイメンズクリニック理事長

はじめに

卵胞期管理から採卵、移植、そして妊娠判定に至る一連の生殖補助医療 (assisted reproductive technology ; ART) の過程において、胚移植法は治療成績を左右する重要なステップである。胚移植法の善し悪しによってはそれまでの苦労が水の泡となることもあり得る。胚移植を成功に導く鍵として次の3つ、すなわち、子宮腔の適切な位置に、子宮内膜が胚受容能を発現しているタイミングで、胚と子宮内膜を同期させて移植を行うことが重要である。本稿では、まず子宮腔内のどの部位に移植するべきかについて述べ、次に子宮内膜の胚受容能獲得を促進する方法について、最後に胚と子宮内膜を同期させることの重要性について述べる。

子宮腔のどこに移植するべきか？

一般的には、子宮底より10mm 前後に移植するべきという考えが受け入れられている¹⁾。子宮腔のより低い位置に移植するほうが妊娠率は高くなると主張する報告もあれば、子宮腔の上半分に移植する限り移植位置は成績と無関係である、とする報告もある²⁾。いまだに子宮腔のどの部位に移植すると最もよい成績を得られるかについては議論が定まっていないといえよう。しかし、われわれは胚を子宮腔のどこに移植するかということは非常に重要なポイントであると考えている。

子宮腔のどこに移植するべきかを考える場合、